

垣する事と相見たり。越後屋敷門よりあふ坂出入の圖りと被存と云々。今按するに、右は後世の推量推説なれば、實事に齟齬せる事もあるるべけれど、爲参考載之。

○尾坂口古戰場

聞見雜錄に所載の寛永八年八月廿二日堀九兵衛高名書に云ふ。金澤尾坂口にての合戦の時、敵には柴田修理殿押寄せられ候時、城持は下間壽保と申者にて御座候。則私頼申候三林善四郎と申者は、尾坂大手に御門をかため罷有候。敵御門へ押寄せ申處に、私眞先に罷出候へば、敵の方より小田七郎殿内かち田新五と名乗、私と鏖打合せ申處に、新五を突倒し、私主の弟三林久藏と申者、年拾六にて若き者故、取飼申候へば、其時褒美として久藏には料足拾貫くれ申候。并に三林方よりはセンコの脇指一腰くれ申候。右之仕合は、堀才助井上勘左衛門兩人は相果申候。今一人河内山次郎左衛門と申者は、未居申候御事。とあり。又夫より以前の高名書なりけん。堀九兵衛心ばせ書付の寫とて載せたり。其の文如左。

金澤お坂合戦、柴田殿押寄せられ候。お坂大將下間ジホウと

申人、私頼申者三林善四郎、お坂大手の御門をかため申候。敵押寄せた七郎内にかちたの新五となりの申を、私まつさきに罷出、新五と鏖合せ、則新五をつき倒し申處に、善四郎弟久藏と申、歳十六に成り候。終に手をふさけずと申故、とりかひ申候。新五が首とらせじと、重ねてよするを、私亦一人つきたふし申處へ、堀才助まゐり、さきをかせぎ、其首おけと申によつて、さきをと存候内に、敵ひき申候。其日は手をふさげ不申候。大將より久藏に爲褒美錢拾貫、私にはわきざし一腰・錢拾貫給候。頼申三林方より村正のわきざし一腰くれ申候。此證據人井上勘左衛門、堀才助・河内山二郎左衛門、三人に而候事。

按するに、右は天正八年閏三月、柴田修理亮勝家越前北庄より加賀一揆爲征伐出馬、佐久間玄蕃・柴田三左衛門、爲先手尾山城を取巻き、遂に落城する由、三州志等に巨細に載せたり。尾坂口合戦も此の時の事なるべし。堀九兵衛は、聞見雜錄に、堀九兵衛本郷は加州江沼郡橋宿也。主は三林善四郎、六條代官也。初軍は葛原合戦也。と同人物語を載せたり。六條代官とは、本願寺の代官人なりとのよしなり。

三州志來因概覽に、尾山城代は三林善四郎・平塚藤九郎・松永丹波・下間壽實法橋等也。富樫勸智錄に、加州尾山城代として、大坂の顯如より下間壽實法橋・本多作内を下し、加州四郡の下司富樫藏人・鎭木右衛門・窪田大炊・堀才助・同宗兵衛、國中の惣代とあり。東本願寺末寺傳記には、永祿十年坪坂新五郎死する故、下間壽實并に本多作内下り、天正八年まで城代たりとあり。景周按するに、坪坂新五郎・下間壽實などの人々、皆同時代にて天正初めの人也。といへり。平次按するに、三林善四郎なども、下間壽實と同じく、天正の初め本願寺より指下したる人にて、壽實と共に尾山城に居て、國中の事務を取捌き居たりしと聞ゆ。三州志古墟考に、天正の初めより三林善四郎、加州石川郡林郷内の上林・中林・下林の三村を押領し、三林と號して賊魁をなし、天正八年に柴田勝家が爲に滅せらる。といへり。今按するに、上林・中林・下林の三村を領するにより、三林と號するとの説は、請けがたし。三林の稱號に據りていへる俗説ならんか。三林といふ姓は、既に續日本紀などにも見たり。三壺記・菅家見聞集に、三林善吉と載せたるは誤也。土屋義

休の金城隆盛私記に、七里三河壩今本丸之地。坪坂伯耆・杉浦壹岐・三林善四郎居往於二三之丸。是等之説。老人道塗謂焉。と見ゆ、有澤武貞の金澤細見圖譜にも、坪坂伯耆守・三林善四郎等は、二・三・丸に居し、門跡より賀州の目代として一揆の黨を下知する其の事蹟往々有之。と載せたり。されば天正八年柴田勝家出馬、佐久間盛政等尾山城攻めの時、尾坂口の門を警衛して防戦せし事、さもあるべし。原本信長記に、天正八年の春、柴田修理亮賀州に至りて平均に申付、修理亮調略にて、賀州一揆歴々の者所々にて生害さす。頸共霜月十七日に安土へ進上、則松原町の西に被懸置候。頸之注文若林長門守并子共兩人、宇津呂丹波守并子、岸田常徳并子、鈴木出羽并子共四人、窪田大炊頭・坪坂新五郎・長山九郎兵衛・荒川市介・徳田小次郎・三林善四郎・黒瀬左近、已上十九人。とあり。北陸七國志に、天正八年閏三月、勝家加賀討入の段に、佐久間玄蕃允盛政謀略を巡らし、尾山城を攻落し、敵將三林善四郎云々以下の敵徒悉く討取りて、加州平均に及ぶ。とあり。織田眞記にも、天正八年閏三月九日。柴田勝家略賀州云々。同年十一月十七日